



2023 年度日中言語文化教育国際学術シンポジウム
研究発表要旨集

2023 年度中日語言文化教育国際学術研讨会
研究報告摘要集



2023 年 8 月 19 日

日中言語文化教育推進会

<海外提携大学>

大連大学 日本語言文化学院

南開大学 国際教育学院 漢語言文化学院

第一会场 ZoomRoom1
日本時間 11:00-11:30
北京时间 10:00-10:30

多语言与人工智能：基于 GPT-4 的中日医疗语言优化研究

大连大学 唐磊

研究契机：

- 1、本研究关注应用大型语言模型（LLM）的语言信息优化工作。OpenAI 最新开发的模型 GPT-4，使用了前所未有的计算和数据规模进行深度学习。其作为潜在的有可能提升信息优化效率的工具，值得语言学领域相关研究的关注。
- 2、本研究参考既有研究的思路，探索基于语言学视角的医疗语言优化方法。旨在高质高效地产出面向患者的通俗易懂的医疗语言。
- 3、由于 GPT-4 支持多语言的输入和输出，对中文和日文的文本及指令进行测试和比较是有必要的。

研究方法：

本研究在医疗语言优化方面主要参考了诊断学的医患交流研究和简明日语的相关研究。在 GPT-4 的测试及应用方面主要参考了近 5 年的人工智能领域的代表性研究。

步骤 1 基于既有研究的理论和方法，总结将专业性强的医疗语言转化为通俗易懂的语言的方法。评估一系列方法的可行性，提炼关键词，产出可应用于人机交互的指令模式。

步骤 2 参考日本国立国语研究所发布的《病院の言葉を分かりやすくする提案》，从疾病、症状、药物、检测方法等多个类别的内容中提取文字量适中的文本，并通过翻译整理出中文及日文两个版本的待优化文本。

步骤 3 将指令与文本进行组合，交由 GPT-4 进行优化。通过限定次数的多次输入输出取最优结果的方法，获取稳定的优化文本。

步骤 4 基于“待优化-优化后”“中文-日文”的 2×2 项分布，对获得的优化文本进行比较和质性评估。

步骤 5 对基于大型语言模型的医疗语言优化思路和现存的限制进行梳理和总结。

结论：

基于目前已获取的信息及优化文本的评估，可以初步认为基于 GPT-4 的医疗语言优化具有一定的可行性。其显示出一定的对简明语言理论的理解和应用的能力。既有研究反馈的对未出现事实的编造，即“开放域幻觉（open-domain hallucination）”的问题在本研究中并未出现。可以认为相对成熟的文本和语言指令的运用减少了该问题出现的几率。尽管如此，生成内容与指令不一致或无法达到指令要求的问题，即“封闭域幻觉（closed-domain hallucination）”的问题在本研究中多次出现。可以认为目前的语言模型对于专业语言优化的任务来说，依然存在进一步实施置信度校准的需要和改善的空间。此外，与中文相比，日文的文本及指令在信息产出的置信度方面表现略好，但在其他方面并未显示出显著差异。

基金资助：本研究为 2022 年度大连市社科院“基于线上医疗环境推动医学术语通俗化的中日比较研究”（项目编号：2022dlsky145）、2021 年度大连大学教学改革项目“基于多模态数据库的日语口语教学资源研究”的阶段性成果。

第一会场 ZoomRoom1

日本時間 11:30-12:00

北京时间 10:30-11:00

东汉至宋代的介词性方式状语

青岛大学国际教育学院 崔云忠

相对于先秦至西汉时期，东汉至宋代的方式介词有了很大的发展。主要表现：语序基本固定；先秦至西汉时期的方式介词变化较大；方式义的介词大量产生。前期产生的方式介词还有一些词处在向介词语法化进程中，显示出虚化的势头。后期方式介词又有新发展，沿用前期的只有“依、随、缘”等；“持、捉”的方式介词用法基本消失；“按、将、据、凭、从”等成为常用方式介词；还产生了“把、仗”、“就、逐”、“著（着）”等5个常用方式介词；“循、照”处在向介词语法化的进程中。

东汉至宋代时期方式状语的基本特点是：1) 介词结构构成的方式状语的语序基本前置，但是仍然有少量的以字结构后置；新产生的介词结构由于源于连谓结构的 VP₁，因而一律前置。2) 介词结构构成的方式状语非常丰富，除了沿用前一时期的方式介词“以、用”等外，还产生了一批方式义介词。

相对于前一时期，东汉至宋代的方式介词有了很大的发展。

1) 语序基本固定。以字结构基本前置，很少后置。有的“用”字结构也可以分析后置结构。新生方式介词来自连谓结构的 VP₁，没有后置结构。

2) 先秦至西汉时期的方式介词变化较大。沿用的主要是“以”、“用”，“用”字很常见。“与”字常表共动方式。“向、当”有时表方式；“于、於”和“因”表方式的用法基本消失。

3) 方式义的介词大量产生。前期产生的方式介词主要有：“持、案”及“依、随”；还有一些词处在向介词语法化进程中，显示出虚化的势头，这类词有：“顺，据、缘、从，将、捉、凭”等7个。后期方式介词又有新发展，沿用前期的只有“依、随、缘”等；“持、捉”的方式介词用法基本消失；“按、将、据、凭、从”等成为常用方式介词；还产生了“把、仗”、“就、逐”、“著（着）”等5个常用方式介词；“循、照”处在向介词语法化的进程中。

4) 方式介词总体情况。共有19个：a) “以、用、与”，b) “持、捉、把、将、仗/杖”，c) “依、随、顺、缘、从、逐、就、著/着”，d) “按/案、据、凭”等；还有“循、照”两个。

5) 新生方式介词的语义来源。b)组源自“握持”义，语法化成工具方式；c)组源自“依从、跟随”义，语法化成依凭方式；d)组源自“凭借、考察”义，语法化成凭据方式。

介词性结构构成的方式状语有很大发展。先秦至西汉时期的方式介词“以、用、与”仍然常用，有些方式介词消失。方式义介词大量产生，东汉至隋产生的主要有“持、案”及“依、随”，还有“顺，据、缘、从，将、捉、凭”等介词用法开始萌芽^[9]；唐五代至宋产生的主要有“将、据、凭、从、把、仗、就、逐、著（着）”等；“循、照”处在向介词语法化的进程中；“捉、持”表方式的用法基本消失。方式介词的语义来源主要有：“握持”义、“依从、跟随”义、“凭借、考察”义。

东汉至宋代是汉语各项语法因素大发展的时期。汉语句法结构的核心成分 S·V·O 自古以来变化不大，变化大的是修饰性成分。方式状语作为动词核心的内核前加修饰成分无疑是发展的重要成分；东汉至隋，有较强的“承前”的特点；唐五代至宋呈现出“启后”特点，尤其是宋代的方式状语与后世的方式状语有较大的一致性。

第一会场 ZoomRoom1

日本時間 12:00-12:30

北京时间 11:00-11:30

上下时间表达方式的认知模型

大连大学 郑新爽

关于时间表达方式背后的认知成因，众多研究用时间隐喻（概念隐喻）论来解释（Lakoff and Johnson 1999； Núñez and Sweetser 2006； Moore 2006、2014； 篠原 2008； Radden 2011； 寺崎 2016 等）。即人是如何认知时间这一问题上，多数先行研究认为，人是通过具体空间概念来理解抽象的时间概念。在此基础上，概念级别又映射到语言级别，产生如“前天”“上个星期”等带有空间方位词的时间表达方式。该概念隐喻论也得到众多学者认可。此外，其中部分关于时间如河流的隐喻认知成因也得到诸多学者的认可。

本研究赞成部分概念隐喻论的观点，值得一提，多数理论在汉语的前后时间认知上是可以解释通的。但时间理论原理的形成最初基本以欧美体系语言数据为研究对象，实验母语对象也以欧美体系母语者为主。并不是以汉语时间表达方式，汉语母语者为研究对象基础之上得出的结论，所以在一些时间表达方式上，特别是在上下时间表达方式的认知成因上还有研究的余地。不同于以往的先行研究，郑（2017，2020，2021，2022）通过大量汉语上下时间表达方式，汉语母语者的认知实验，初步提出了汉语上下时间表达方式的认知成因是由汉语由上而下的书写体系和认知主体化二者相结合的复杂实际认知要素而来。

众多理论提出河流隐喻（史，何，陆 2007； 瀬戸 1995； 左 2007； 冲本 2012 等），用河流的上、下游来解释汉语上下时间表达方式的成因。认知源于实际。隐喻是涉及两种不同领域存在相似点基础上进行的投射写像。上下时间表达形式的上下概念如用河流概念来解释，那么对象领域应该是如瀑布这个现实认知直接而来。但我们日常生活中，瀑布的存在毕竟少数，不足以支撑我们对于上下这种时间概念的目标领域映射基础，相反我们的河流认知多趋于平缓认知，不是瀑布的垂直上下认知。而应是从具有牢固认知基础的上下书写顺序直接而来。在 20 世纪 50 年代以前，固定的上下书写体系形成了“上”是“过去”，“下”是“未来”的顺序认知，这种顺序认知提供了时间认知基础。即使在脱离实际书写顺序这一实际认知之后，人也具有“上”是“过去”，“下”是“未来”的抽象时间认知即主体化的能力。形成实际的上下时间认知概念。当然，郑（2021）通过对汉语母语者的关于时间和书写顺序的关联性的认知实验也验证了这一观点。也因此，在具有两种书写体系的日语中，看不到上下书写体系对于时间认知影响的优位性。本研究也将继续围绕汉语书写体系这一理论来论述日语中的上下时间表达方式的成因。并对日语母语者进行时间认知实验。

本次研究的主要主张是，在时间表达方式研究中，并不是所有认知成因都可以用概念隐喻论来解释，要贴合实际的认知习惯，提出符合母语者实际认知习惯的成因理论。

第一会場 ZoomRoom1

日本時間 14:00-14:30

北京时间 13:00-13:30

中国漫画におけるオノマトペの使用と日本語訳の特徴

大連大学 崔小萍

2019年から日本のコミック市場、特に電子コミック市場が急速に拡大しつつある中、中国や韓国の漫画が日本市場に参入するようになった。これにつれて、漫画の日本語訳が増え、その中で特に難しいのが、オノマトペをどのように翻訳するかという問題である。日本語のオノマトペは日本語学習者にとって理解も産出も難しく、上級になってもなかなかスムーズに運用できるようにならない。一方で、日本語母語話者は中国語のオノマトペの理解が難しい。そこで、本研究では中国漫画 6 作品を対象にケーススタディ的に調査し、中国語のオノマトペの使用状況とその日本語訳の特徴について論じる。

オノマトペの翻訳研究についてはいずれも日本語作品の中国語訳を考察しているものであり、その逆方向の中国語作品の日本語訳についての考察は見られない。また、訳語に対する論述は個々の表現にとどまっており、その規則的なものがさらに突き止める必要があると思われる。そこで本研究では中国語作品の日本語訳を考察することによって、対象中国マンガのオノマトペの使用を分類し、その日本語訳のパターンを明らかにする。

本研究では、日本語訳にされた 6 作品の中国漫画を対象に調査を行った。いずれもウェブトゥーン (Webtoon) 形式、すなわち縦型スクロールのデジタルコミックである。これらの作品計 186 話のセリフと描き文字 (絵の中に直接書き込まれた文字) を考察の対象とする。その結果、186 話で延べ語数 1,564 語の中国語のオノマトペが抽出された。これらのオノマトペは大きく 17 類 1,182 語の「頻繁使用語」、31 類 135 語の「限定使用語」、11 類 (条件付き) 247 語の「限定短文」の 3 つに分類できる。また、その翻訳の処理法として、対等処理法、収縮処理法、拡張処理法の 3 つが挙げられる。

これらの手法はいずれもローカライズのマーケットニーズに応じて、翻訳者の存在感を弱める行為である。これは Venuti, L. (1995) が指摘した翻訳者の透明性 (invisibility) ということになる。中国漫画の日本市場向けのローカライズは日本の文化や社会認識に認めてもらえるように、翻訳者の透明性が求められる。しかし、日本国外の漫画が日本市場の需要を考慮して日本式に翻訳される場合、全体的に、中国語すなわち起点テキストの異質性が抹消される傾向もある。言い換えれば、漫画のローカライズは日本の読者に向けた受容化 (domestication) の作業である。Venuti, L. (1995) は、受容化に対抗するために、異化 (foreignization) という概念を提出している。すなわち、原文に忠実に、直接的に翻訳するという思考方式である。しかし、漫画の場合は、作品の内容によって異なるものの、多くの場合において、読者に「これは輸入した海外の漫画だ」と気づかないことが望まれる。すなわち、ローカライズは受容化を実現するための作業である。そのため、より多くの読者を獲得するというビジネスの面においては、異化の作業は避けなければならないことである。

第一会場 ZoomRoom1

日本時間 14:30-15:00

北京时间 13:30-14:00

「漢語拼音方案」の問題点及びその修正案の試み（三）

— 声母と声調の表記及び修正案の総括 —

久留米大学外国語教育研究所 李 偉

本発表は、「漢語拼音方案」の修正案に関するシリーズ研究の第3部である。

第1部では、字母 *o* の廃止及び韻母修正案を中心に論じた。字母 *o* の問題点に関する先行研究に基づいて、音韻論的分析を行ない、実験音声学の研究成果を参考にして、また中国小学校国語教育と第二外国語としての中国語教育の現場における字母 *o* によってもたらされた問題を分析した。そうした研究によって字母 *o* を廃止する構想を提起し、韻母修正案を提示して、中国語音節構造体系の分析とその課題を踏まえ、中国語教育における韻母ピンイン教授への提言をした。

第2部では、「漢語拼音方案」の字母 *y,w* と字母 *ü* 及び *iou,uei,uen* などに関する表記上の添加・省略規則によってもたらされた問題点を指摘し、*y,w* の性質（隔音字母、声母、韻母のどちらか）を音韻論的に分析し、介音を韻母に入れる考え方と介音を声母に入れる考え方に対して、介音を独立させ、中国語音節構造三分法の「声母+介母+韻母」を主張した。そして①字母 *y,w* を廃止する②字母 *ü* を *v* と表記する③ *iou,uei,uen* の主母音省略規則を廃止する④音節による分ち書きの4点を提言した。

第3部の本発表では、まず、声母の表記と声調の表記に関するこれまでの先行研究を振り返り、音韻論視点から現行「漢語拼音方案」の声母の表記の合理性を論じ、声調の表記の優劣を考察する。これらの分析と考察を通じて、現行「漢語拼音方案」の声母と声調の表記の現状維持を主張する。また、第1部、第2部及び第3部前半の考察をまとめて、このシリーズ研究を締めくくる。現行「漢語拼音方案」の問題点について、字母 *o* を取り立てる必要性、字母 *y,w* の使用によってもたらされた混乱、*iou,uei,uen* の省略規則による発音上と声調表記上の問題、*ü* の表記によるキーボード入力の問題、介音の位置付けの問題、音節構造分析の問題、及び関連のあるピンイン正書法の問題、声母 *j,q,x,zh,ch,sh* 表記の問題、声調表記の問題などが挙げられる。上記問題の解決策として①字母 *o,y,w* の廃止、② *iou,uei,uen* に関する省略規則の廃止、③字母 *ü* の変更を提案し、更に④音節構造の三分法、④音節分ち書きによるピンイン正書法を提案する。最後に既に55年間実施された現行「漢語拼音方案」における問題を包括的に解決する時期が到来し、「国際中文」教育の更なる発展のために、「漢語拼音方案」の最終修正案を提言し、今後の中国小学校国語ピンイン教授と第二外国語としての中国語ピンイン教授に寄与できることを願う。

第一会場 ZoomRoom1

日本時間 15:10-15:40

北京时间 14:10-14:40

テレビドラマ『三国志演義』における字幕翻訳の研究

—動物の成語を対象として—

大連理工大学 林楽青 蔣新池

『三国志演義』は昔から日本に伝播し、日本の人々に愛されてきた。1990年代以降、映像としたテレビドラマ『三国志演義』はアジア全域で人気を博し、日本での放送でも大きな反響を呼んでいる。テレビドラマ『三国志演義』は日本で上映す際、字幕翻訳が視聴者にドラマの内容を理解させるだけでなく、中華文化の知識を伝える重要な役割を果たしている。本研究は、テレビドラマ『三国志演義』における動物の成語の字幕翻訳について研究を行う。

今まで動物の成語の翻訳に関する研究が一部存在しているが、映像字幕における具体的な成語の翻訳方法についての研究はまだ不十分だと言える。また、スコポス理論を用いた字幕翻訳の研究があるが、字幕翻訳における成語とりわけ動物の成語に関連する研究は管見の限り見当たらない。本研究では、翻訳の目的を視聴者の理解促進と中華文化の伝達と設定し、スコポス理論の視点から動物の成語の字幕翻訳について分析を行う。具体的な研究方法としては、『三国志演義』の字幕を対象にし、動物の成語の翻訳方法を意識、直訳や省略などの視点から、それぞれの翻訳手法の長所と短所、効果を考察する。また、翻訳の選択基準としてスコポス理論の三ツルール、つまりスコポスルール、結束性ルール、忠実性ルールに基づき、翻訳の品質と視聴者の受容性を考慮する。

結果として、意識は原文のニュアンスや感情を表現し、字幕を理解しやすくする利点があったものの、中国文化の普及に影響を及ぼす可能性が十分考えられる。一方、直訳は文体や中国文化の精髓を伝える利点がありますが、文化の違いに注意が必要である。さらに、省略は簡潔で視覚的に読みやすい字幕が作成できるが、中国文化の醍醐味を一部失ってしまう可能性が十分ありうることを明らかにした。

結論として、字幕翻訳者は翻訳の目的に基づいて適切な翻訳方法を選択し、正確かつ魅力的な字幕を提供する必要がある。スコポス理論は翻訳の指針として有用であり、視聴者の理解を促進するために意識や省略を使用することも適切である。しかし、文化的な背景やニュアンスの違いを考慮し、適度な直訳を行うことが考えるべきである。

本研究は、『三国志演義』の字幕翻訳に関する新たな知見を提供し、映像字幕における成語の翻訳方法についての理解を深めることを目指している。今後の研究では、他の成語や映像作品における翻訳方法への研究をさらに進めていきたい。

第一会場 ZoomRoom1

日本時間 15:40-16:10

北京时间 14:40-15:10

日本近代に於ける中国戯曲の翻訳

—翻訳文体と研究理論との関係を中心に—

山西師範大学 孟偉

翻訳は外国文学を受け入れや伝播する最も良い方法と手段であり、外国文学研究の基礎である。日本近代では、多くの中国戯曲作品が相次いで翻訳され、その文体は多様であり、大雑把に言えば、訓訳（訓読直訳）、歌訳、口語翻訳（現代口語も含め）がある。訳文体は時代の流れにつれて変化し、訓訳から歌訳、そして口語翻訳へと移っていく。それに伴い、翻訳の方法も直訳、意識、直訳と意識共存という変化があり、注釈も異なる形態に現れた。内容的に見ると、翻訳作品は知識の普及を旨とするものであるが、研究の視点を軸にしてとらえれば、翻訳理論や研究理論まで進めて考えることができる。つまり、翻訳の文体や翻訳の方法などは翻訳理論や研究理論の現しであると考えられる。

訓読直訳千数年も続いているが、欠点も多く存在している。その不足を補うために、訳者は常に解題、注釈等の方法を使って、訓読直訳で行き届かないところを説明する。その結果、翻訳は紹介の域から抜き出し、単語の意味や出典等に深く分け入り探求することになった。歌訳とは、訳文が舞台での上演を想定した歌舞伎調や浄瑠璃の文体である。歌訳は日本古典演劇が好きな人の興味に合ったが、中国戯曲にある「香」が消えてゆく、即ち「中国の馨香」が失った。その故、青木正児をはじめ、学者たちが「香を見つかり出す旅」を出発した。王国維が西村天囚に書いた「琵琶記序」で議論した自国の文學に精通する「老于本国之文学」や人を知りて世を論ずる「知人論世」という文学理論が訳に対する役割を道破し、日本近代訳者の香を訪ねる道を切り開いた。中国の戯曲はもともと舞台芸術であり、口語や俗語に含んだ庶民性の強い文学である、其の翻訳に当たっては口語訳が最も適当であると考えられる。翻訳は忠実に再生だと主張する吉川幸次郎は、現代口語訳の文体で戯曲の表現する「言」から「心」を探る訳を試み、「言」と「心」を関係する翻訳理論ないし研究理論を醸した。

訳の基礎単位は「言」であり、「言」の目標は「事」と「心」を知る、故に、翻訳は異なる言語の間で行われる相当な価値の転換のみならず、創造の一種でもあり、研究でもある。翻訳文体の変化は翻訳方法や翻訳理念の変化に繋がり、やがて、中国戯曲の翻訳は最初の紹介から「言、事、心」の三位一体の研究理論まで生み出されたのである。

第二会场 ZoomRoom2

日本時間 11:00-11:30

北京时间 10:00-10:30

利比英雄《听不见星条旗的房间》中的空间书写与身份建构研究

吉林大学 宋婷 张荆晶

美籍日本文学家、翻译家、学者利比英雄（Ian Hideo Levy）于1992年凭借其自传体小说《听不见星条旗的房间》斩获日本第十四届野间文艺新人奖，并因此在日本文坛一举成名。

在日本学界，有关《听不见星条旗的房间》的研究和评论数量可观。其中研究对象多聚焦于作品的感官叙事、权力话语及语言特点之上。而未见将空间书写与主人公身份建构二者关联，论述该小说主题的相关研究。《听不见星条旗的房间》中出现的“空间”不仅表现为话语生成的叙事背景与人物的行为场域，还影射了主人公伯恩在身份缺失与重构过程中不可或缺的精神世界。此外，该文本中还可可见多种空间转换，为从空间视域展开文本分析提供了可能性。

本文以《听不见星条旗的房间》为文本对象，探讨小说中的空间场域如何参与主人公的身份建构。首先聚焦于主人公伯恩跟随外交官父亲辗转于亚洲各国的移动空间，围绕移动空间下的“他者凝视”以及空间的频繁移动对主人公造成的情感缺失，探究这样的移动空间对主人公伯恩带来的“身份缺失”。其次着眼于横滨领事馆这一权力空间，探讨主人公在横滨领事馆的空间之下如何陷入身份危机和种种困境。重点从领事馆空间的地理构造和伯恩父子的代际冲突的角度，梳理主人公在这一空间下爆发的“身份危机”。最后，探讨母性空间——新宿的特点，挖掘东京都市空间体验对于主人公完成全新身份探索起到的作用。并通过具有包容性和颠覆潜能的母性空间新宿，构建出对于摆脱父亲、建构全新个体身份的图景，最后实现自我身份的重新建构。概言之，通过解析上述不同空间场域下主人公从身份缺失、身份危机到身份探索与重构的过程，进而阐明空间书写对该作的人物身份建构所起到的重要作用，借此挖掘《听不见星条旗的房间》的文本内涵与文学价值。

关键词：利比英雄；《听不见星条旗的房间》；空间；身份建构

第二会场 ZoomRoom2

日本時間 11:30-12:00

北京时间 10:30-11:00

《将死未死的青》中的伦理书写探讨

大连大学 马博雯

《将死未死的青》是日本作家乙一的一部短篇小说，讲述了胆小怕事的主人公正雄因竞选班委一事在班级内造成误会，从而被班主任羽田老师带头霸凌，但在自己另一人格青的影响下，正雄开始对羽田老师进行反击的故事。本文试图运用文学伦理学批评理论中的相关概念，以自由意志和理性意志的关系为焦点，从伦理的维度出发，借助相关专业术语，如伦理环境、伦理身份、伦理选择等，对作品中的主要人物正雄和羽田老师的言行举止进行分析，叙述其伦理价值，并得出相关伦理启示。

首先，从伦理环境的角度出发，小说中所设置的伦理背景与环境与现实生活息息相关。一是结合了作者自身的成长经历。他曾因肥胖在学校中被班级同学有意无意的排挤，始终难以融入群体之中。二是结合了日本真实的社会现象。众所周知，在日本，霸凌问题已经作为一种社会问题存在已久，出台相关政策或是加大管理力度，其作用似乎都微乎其微，即使到了目前，霸凌现象的数量依旧居高不下。其次，正雄和羽田老师之间的伦理关系与他们各自伦理身份的变化，以及每一次变化所带来的伦理选择，构成了整部小说的核心部分，并推动着故事情节的发展。当二人处于师生伦理关系时，其语言和行为均是由理性意志所支配，其言行举止均符合各自的伦理身份；当二人之间的伦理关系发生变化，由师生关系转向霸凌关系时，羽田老师开始受到自由意志的影响，对正雄做出一些非理性的举动；当二人的伦理身份发生第三次变化时，即由霸凌关系再次转变为迫害关系，此时不论是正雄还是羽田老师，均受自由意志的控制，老师为了声誉试图杀死正雄，而正雄为了生存也试图杀死老师。然而最终，二人的自由意志还是被理性意志所控制，老师选择了求饶，正雄则选择了原谅。在这三次转变中，二人均经历了“理性意志——自由意志——理性意志”这一过程，这一过程也充分外化了自由意志与理性意志之间的碰撞。正雄的转变体现在“忍气吞声、反思自己——反击报复——原谅老师”，老师的转变体现在“好好先生——风评跌落，霸凌学生——身受重伤，乞求原谅”。虽然二者的外在表现方式不一致，但其内在核心都体现着相同的伦理价值，即自由意志和理性意志同时存在与人体内，人大部分时间由理性意志主导。即使偶尔会出现突发事件，自由意志会占上风，暂时摆脱理性意志的控制，但这种自由，是永远无法超脱理性的范畴的，最终都会被理性所遏制。最后，通过对作品的分析，可以得出相对应的伦理启示。自由意志与理性意志的碰撞，有力的推动了故事情节的发展。而其所展示出的伦理价值，也对于现实社会中所存在的社会问题，有着一定的教诲和启示作用。例如，对待霸凌问题，我们应当如何反思和应对。对于现代社会的师生关系，我们又应当如何处理和看待。

第二会场 ZoomRoom2

日本時間 12:00-12:30

北京时间 11:00-11:30

基于课堂叙事话语的日语教师学科教学知识研究

大连外国语大学日语学院 路雅婷

本文以三位高校日语精读课教师为研究对象，通过课堂观察、录音和教师访谈收集日语课堂上出现的叙事话语并探究叙事话语所体现的教师学科教学知识。数据分析时首先采用话语取向的叙事分析方法和多模态话语分析法对课堂录音、课堂观察记录进行考察，其次借助质性分析软件 NVivo12 并结合访谈内容，对课堂叙事话语所体现的教师学科教学知识，从教学内容、教学方法、教学对象三个维度进行编码。研究发现，在教学内容维度上，日语教师的学科教学知识包括利用课堂叙事补充文化背景知识，帮助学生形成对课文的宏观认识；为学生提供高质量的可理解性输入和语言示范；引导学生树立正确的思想意识和价值观念。在教学方法维度上，日语教师的学科教学知识包括利用课堂叙事强调教学重点；对抽象概念进行举例说明和解释。在教学对象维度上，日语教师的学科教学知识包括利用课堂叙事表达态度，建立和谐的师生关系；赋予学生讲述者身份和话语空间，促进学生与文本的互动。其中，本研究进一步证明了提供语言示范是二语/外语教师共通的学科教学知识，也是外语教师区别于其他科目教师学科教学知识的特殊之处，而塑造意识、引导观念则是我国外语教育情境中教师学科教学知识的独特之处。本文在前人研究的基础上，进一步表明了通过课堂话语的微观分析探究教师实践性知识的可能性，展现了学科教学知识如何在课堂上转化为课堂叙事话语并作用于学生的学习。本研究的发现可以促进教师自我反思和教师认知研究的发展，并对教师教育有一定的参考和借鉴意义。

第二会場 ZoomRoom2

日本時間 14:00-14:30

北京时间 13:00-13:30

苔と錦から見る中日古典詩歌における「紅葉」心象表現

黒龍江大学 韓春紅 劉翌婷

唐詩は中華文化の至宝であり、世界の多くの国家及び民族に大きな影響を与え、また、歴代の古典詩の中で、最も優れたものとされ、日本の漢詩にも大きな影響を及ぼした。一方、和歌は漢詩に対して上代に発生した日本固有の詩歌であり、歌人の個性的な感情や思想が盛られていると言われる。

唐詩と和歌の中では、紅葉は秋の代表的な風物として、よく吟詠されるとされている。中国では、紅葉は古来より文人墨客がよく詩歌に詠んだ風物であり、司馬相如の著した『上林賦』に書かれた「樛楓枰櫨」の「楓」はその立証である。日本なら、日本人の生活が昔から自然風物と強く関わっており、季節に対する敏感な歌人たちは常に春夏秋冬の代表物を中心に四季の特徴を吟詠する。そのうち、紅葉は秋の象徴として、古くから和歌の題材となっている。というわけで、唐詩にせよ、和歌にせよ、紅葉という言葉が多用されたと言える。したがって、本論文においては、中日古典詩歌における「紅葉」心象表現をテーマに検討を行い、しかも、中国国家図書館の「全唐詩分析系統」と国際日本文化研究センターの「和歌 語句検索」によるデータベースに基づいて論じたものである。

紅葉は自然風物のみならず、色彩表現の一つでもある。上述のデータベースにより、中日古典詩歌において、紅葉とよく組み合わせた色彩表現が異なっている。唐詩の場合は、「碧」「白」「青」「黄」「緑」など直接的に現れる色との組み合わせも多く、自然風物「霜」「苔」「山」「水」「月」などを通しての対照技法で紅葉を取り立てて表現するのも少なくない。しかしながら、和歌の場合は、「白」以外の色表現が極めて少ないかわりに、色名でない方法で和歌に彩りを重ねていたのであり、例として「山」「錦」「水」「月」などが挙げられる。よって、本論文では、「苔」と「錦」をキーワードにして「紅葉」心象表現に関して検討を試みた。

唐詩の紅葉は「苔」という寒色系の風物と強く繋がっており、両者の間で鮮明な対比となっているので、「寂寥」、「郷愁」や「愁傷」などの気持ちがよくリアルに表わされており、「詩言志」という考え方に相応しいのである。一方、和歌の紅葉は「紅」を帯びた「錦」によってより一層紅葉の美さらに自然美を引き立て、独自の風格を形成させ、日本の独特な美意識から大いに影響されたとと言える。

第二会场 ZoomRoom2

日本時間 14:30-15:00

北京时间 13:30-14:00

王朝时期的日本汉诗集：和歌集对中国文学文化受容与变容之津桥

—以松意象为中心—

南开大学文学院 秦岭

由于王朝时期的日本以崇尚中国文学文化为主流，许多学者进行过《万叶集》等和歌集对中国汉诗的受容研究。但是，部分学者所采用的论证思路是通过平行比较得出某一意象或意蕴的相似性，加之对当时中国文学正在影响日本的认识而得出重复性的结论，难免有以果证因之嫌。如有学者指出日本仙鹤含松枝的纹样亦体现出中国文化的重大影响，是对中国鹤衔花纹样的误用。

但笔者认为，部分研究在进行受容研究时缺少对意象的溯源探寻，同时对与受容并生的变容现象也有所忽略。例如对仙鹤的研究忽略了中日两国共同存在的羽衣传说源头，神灵的元素在更早的时期就已经出现在了两国的文学之中；松枝上挂帛以祈福以及松树降神等的日本传统在《万叶集》前期的创作之中就有记述。鹤衔花图案在日本发展为了飞鹤衔松枝图案也许不仅仅是受容的结果，松枝代替了花并一定是误用或者随机选择，而是产生了变容。

对变容的论证并不是在证明日本未曾接受过中国的影响，而是笔者认为，部分研究者在探究日本古典文学受容中国古典文学的时候跳过了一步，即日本汉诗的创作。日本汉诗作为与之同一时间真正占日本文学主流的文学体裁最直接受到中国汉诗的影响，不应当被忽视。所以本文以“松”意象为例，梳理分类松意象在中国古诗、日本汉诗与和歌之中的各种表现，以佐证日本汉诗不仅起到接受中国汉诗影响的作用，也起到本土文化对汉文化进行变容的桥梁作用。

古代东亚地区的文化交流之频繁，以至于很多文化都有着混合发展的特点，难以以国族边界进行生硬划分。所以学者们在忽略日本文学的变容成分而进行其对“中国的”接受研究时，或者一味强调“日本本身的”传统之时，其实则是又陷入了现代视角的怪圈。柄谷行人曾经指出：“正如国学家想象汉文学以前的日本文学时，是因为有了汉文学的意识才要这样做。”因此实证研究应当走出视角，追本溯源以探求的并非影响的发出者与接收者，而是文学文化交流变化的历史过程。

第二会场 ZoomRoom2

日本時間 15:10-15:40

北京时间 14:10-14:40

跨文化交际学视阈下芥川龙之介的中国之旅

吉林大学 陈云哲 张锦 王琪

大正时代的日本，由于当时铁路网在某种程度上的完善以及旅行社方面对中国旅游的安排，使得周游中国成为可能。1921年3月至7月，芥川龙之介作为大阪每日新闻社的记者来到中国，游历了上海、南京、九江、汉口、长沙、洛阳、北京、大同、天津等地，实现了唯一一次中国之旅，芥川不光领略到中国的自然风光，同时也不乏与中国新、旧知识分子的交流，并且留下了叙事中国的诸多文字。

芥川龙之介被文学界誉为“鬼才”，这位天才作家在其短暂的35年的人生中创作了140多篇文学作品，且篇篇堪称佳作精品。他的短篇小说分为现代题材和古代题材两类，历史短篇题材新奇、构思精深。而中国古代历史文化为其创作所提供的大量营养则成为历史小说成功的一个重要因素。日本《文艺春秋》杂志社于1935年设立奖励纯文学创作新秀的日本最高纯文学奖——“芥川龙之介奖”，一直延续至今。

通常在我们走入异国他乡会受到一定的文化冲击，从而带来心理压力和各种不适，通过对芥川中国之旅及相关文学文本的解读，我们会发现芥川的中国之旅始终充满了矛盾性：一方面，一直存留在作家精神世界中的充满文化意味的传统中国形象已经崩塌，理想与现实的裂隙和巨大的鸿沟，使作家的内心始终有一种失望和悲戚的情绪在流动；另一方面，随着与中国社会现实的直接碰撞，作家的灵魂深受了极大的冲击，开始理性地思索战争对于一个民族的意义以及它对人类本身所带来的伤害。究其原因，中国之旅的矛盾性是来自于芥川在中国之旅成行之前形成的关于中国的文化思维定式对其精神世界的巨大影响。

中国对于芥川龙之介来说，是长久以来自己钟爱的汉诗、南画的故乡，是他熟读的《西游记》、《水浒传》、《三国志》的舞台，是他儿时起就向往的国度。芥川对于中国形象的感知、认同和建构，主要来自于中国古典的小说文本，并将之作为自己文学叙事的母本和话语资源，将古典小说融入近现代的文化因素，形成一次次跨文化的文本互文性。由于中国之旅前的中国文化思维定式的先期形成，芥川从踏上中国土地开始，便开始了古典的浪漫的寻觅，然而呈现在芥川眼前的却是当时被列强瓜分、占领下的当时中国的恶俗的现实。这一矛盾打破了芥川的中国文化思维定式，于是，他眼中的不仅仅是一个拥有古老灿烂文化的中国，同时也是现实中肮脏破败而又落后的中国，而与中国新、旧知识分子的交流，更加深了芥川对中国的了解，也促成了其文学创作内容、风格的改变。

第二会場 ZoomRoom2

日本時間 15:40-16:10

北京时间 14:40-16:10

羅祖の伝説における羅状元のイメージ

明海大学外国語学部 夏雨

明末清初に興った羅教は、瞬く間に運河に沿って中国全土へと広まり、様々な分派をも派生しながら、それぞれの地方に定着し、大きな影響をもたらした。

その教祖は羅祖とされ、羅祖に関する伝説も、時代を降るごとに内容が増幅され、神秘的色彩を帯びていった。羅祖の伝説はそれぞれの地方でも違いが見られ、大きく分けて南北の二系統に分類し得る（詳しくは筆者の拙論にて論じた）。北方系統の伝説は主に早期の羅教経典『五部六冊』などに由来し、比較的事実に近いと思われる内容であり、対して、南方系統の伝説は仏教や道教のみならず、民間の俗文学などからも素材を取り入れ、羅祖のイメージが膨らんだ内容となっている。

こうした伝説のうち、南北に共通して見られる、羅状元というイメージがある。北方系統としては、近年、梁景之が羅祖の事跡などを記録した「金山寺碑」を発見した際に行った実地調査で、そこに羅公塔（羅状元塔）と呼ばれるもの存在していたことが判明し、現地の人によれば、現地では羅教の創始者羅祖を「羅状元」と呼ぶのだという。また、南方系統としては、福建一帯で羅教の創始者羅祖の名前は羅夢鴻として伝わっているが、現地では羅祖を「羅状元」として尊崇していた。もっとも、羅祖が状元になったという記載は全く史料には見られないが、歴史上、羅洪先という状元は実際にいた。これらの事実から、教祖としての羅祖を状元の羅洪先と混同した、或いはわざと両者を緋い交ぜにした可能性が大きいと考えられる。

本稿では、羅教関連の文献のみならず、その他の関連史料をも適宜分析して、羅状元のイメージが形成され、展開していった過程を考察し、そのイメージが南から北へ、或いは北から南を伝わったものか、はたまた、同時発生してそれぞれの地域で広まったのかについて、結論も導きたい。また、その背後に隠された、羅祖を羅状元として信奉した羅教信者の、教祖に対する意識をも分析したい。